

興 禪 護 國

蔭涼軒 後 藤 瑞 巖

一

今次事變始まつて以來既に二年有餘、わが皇國は八紘一字の理想を實現せんが爲に、舉國一致の大活動を展開してゐる。此の理想の實現は、云ふまでもなく、道義日本を盟主とし指導國とする東亞新秩序の建設に外ならない。而して、之が實現は、今や漸く一步を踏み出した所であつて、絶對に退轉を容さない状態に立ち至つてゐる。従つて、一億國民は、皇國の大使命に對する一層深き強き自覺を持ち、之に基いて更に鞏固なる一致團結不撓不屈なる精神を昂揚し、之が實現達成に一入の強き努力を拂はねばならぬ。

斯の如き要望は、今や、殆んど一億同胞全體によつて抱かれ自覺され、亦之が現實化に向つての實踐も身を以て行はれてゐる所である。然し、かゝる自覺と實踐とは、今日、完全なる状態に在るとは云ひ難い。一層強く鼓を打ち令を行する必要なしとは、必ずしも云へないのである。近時、禪に對する要望が愈々昂揚され、之に伴つて、興禪護國思想が倍々強調される様になつたのであるが、

此は、思ふに、斯の如き意味に於ける必要より必然的に起れる事象であつて、國家の爲又宗門の爲誠に欣快とすべきである。

二

興禪護國と云ふ語は、日本禪宗の始祖榮西禪師の名と共に、日本佛教史上に輝いてゐる語である。師は、建久九年（一八五八）、攝津の護國山興禪寺に於て、日本に於て禪宗を興起せしむる意義に就ての自己の信念を披瀝し、以て天台宗の人々の禪宗開立に對する非難に應へん爲に、「興禪護國論」三卷を撰述されたのであつた。即ち興禪護國の語は、獨立せる宗門としての禪宗を日本に於て興起された榮西禪師によつて、始めて用ひられ吾々兒孫に貽し與へられたものである。

興禪護國とは、興禪即護國を意味する。禪を興起せしむる——否興隆せしむる事が、とりもなほさず國家を鎮護することであることを意味する。禪者が一向に禪を興隆せしむることは、禪者の第一の任務であるのであるが、禪者と雖日本國民である——否日本國民としての禪者であるのであるから、禪を興隆せしむることが禪者の第一の任務であると同時に、國家を鎮護し發展せしむることも亦禪者の第一の任務であらねばならない。一層端的に云へば、國家を鎮護し之を發展せしむる爲には禪を興隆することが最も適當なりと信するに非ざれば、日本の禪者は禪を興隆すべきに非ずと云はねばならない。而て、禪を興立せしむることは、國家を鎮護し發展せしむる上に於て最も適當

であるのである。茲に興禪即護國なる所以が存する。

三

事變始まつて以來、日本の各層に於て、日本精神が高く強く唱導さるゝに至つたが、然しこの精神の核心に就ての認識及び確信は、未だ一般に十分に徹底してゐるとは云へない。

日本精神の核心はまことである。まことは眞事である。「眞」は外對立を絶し内差別を超えたる境地である。即ち無の境地である。而も、この無の境地は、有に對する無でなく虚無の無でなく、内容の充實せる空の境地である。而て「事」は現象一般である。吾々個々の行爲、國家の活動、社會の文化等すべてこの「事」に外ならない。まことは、かゝる無の境地より、自然に何等の作爲なしに生れ出づる現象一般である。即ち、現象一般は、かゝる無の境地の無作の妙用であるのである。かくして、まこととは眞空妙有の關係に在るのであつて、この關係は空而有・虚而靈・寂而妙なるものであると云はねばならない。

斯の如きまことは、雷に日本精神の核心をなすのみならず全法界の核心をなすものであるが、二千六百年の尊い歴史の齎らす所によつて、日本人のみ之を高き度合に於て具有してゐるのである。それは、日本人各自の内部に於て、本來清淨常住寂然たる國常立尊くにじょうたんのみこととして、火にも焼かれず水にも溺れず儼然として存立してゐるのである。さりながら、人は、自己が本來抱藏してゐる靈寶を、

何人も明白に自覺してゐるものではない。又、その自覺を有する場合に於て、何人も一樣に深いものではない。日本人と日本精神との關係に就ても同様なことが云へる。かくして、日本人が本來具してゐる靈寶たるまことを自覺する最も堅實なる道如何？又既に自覺を有する人のその自覺の深さを一層深くする爲の最も堅實なる道如何？と云ふ問題に逢着するのである。

四

禪の修行が自己究明であることは今更めて云ふを要しないことであるが、この自己究明は、自己を深く掘り下げて行くことによつてのみ可能である。幾多の古徳の行履はすべてこの自己究明の活記録であり、千七百の公案もこの自己究明の好素材である。

然るに、自己をあくまでも深く掘り下げて行つて、吾々が見出だす所の自己の本質——自己本具の生地のままの相は、まこと以外の何物でもない。十年二十年辛參苦修、入り得覺り來る絶妙の佳境は、十方世界に充滿し光燿無量なるま（眞空）の境涯と、之れより自然に流露すること（妙有）の現實境であるのである。この境涯こそ完全にまことの道にかなふものであり、吾々日本人がすべて把持し實踐せねばならない無作の妙用であり「平常心是道」底の道である。

斯の如くにして、禪者は、日本精神の核心・自己の本質たるまことを、最も堅實に把握し深化して行くのである。而も、このまことを把握し深化する道は、一人禪者のみに妥當するものではなく

國民全般に妥當するものである。かくして、まことを、禪者的に實參實證以て把握することは、護國の爲に懸命の努力を拂ふことに外ならないのである。吾人が、興禪即護國であると云ふ所以は茲にあるのである。

正に邪を格すべし、小能く大に敵す、皇天私なく功有徳に歸す。日本千年の社稷、遠邦萬里の孤征、風雷一掃して空となり、佛天震怒遏め難し。一箭を發せずして煙塵息み、一刃を血ぬらずして天地清し。偉なるかな雄猛の尊、乾坤の運を再造す。鳥獸魚鱉咸く若ひ、漁樵耕牧新なるが如し。此の興國の名を掲げ、昭に太平の業を示す。良久して云く「萬古千秋雲雨を出し、十洲三島清風を起す」

(佛光國師語錄)